13　誰も排除しない避難所づくり（災害に伴う人権）

（ナレーター）皆さん、いかがお過ごしですか。福岡市がお送りする「こころのオルゴール」の時間です。今日は私、立川生志がお届けします。今日のタイトルは「誰も排除しない避難所づくり」です。

２０１６年に起きた熊本地震の直後、熊本市で民間の避難所がつくられました。およそ６０人の障がい者を含む、７００人以上の被災者を受け入れた熊本学園大学。あらゆる人を取り残さず、排除も隔離もしないインクルーシブな避難所の代表的な事例となり、「熊本学園モデル」と呼ばれています。

一般の避難所は、車椅子が動けるスペースが狭く、バリアフリーのトイレが設置されていない場所もあります。地震の後は介助する人も足りない状況で、困り果てた人たちが熊本学園大学に集まりました。

熊本学園大学の元教授、東俊裕さんは、ご自身も車椅子の利用者であり、国の障がい者の制度改革に関わってきました。東日本大震災では被災地に足を運び、障がい者の状況を調べる仕事もしています。こうした経験を活かし、熊本地震の支援活動に力を注いできました。

【東さん役】熊本は震度７の地震に２回襲われ、避難所はどこも人があふれていました。熊本学園大学に避難してきた車椅子の人は、部屋の隅に固まり、トイレにも行けない状況でしたので、教職員の仲間と一緒に障がい者も安心して避難できる避難所をつくりました。

（ナレーター）東さんたちは、大学の広いホールに障がい者が避難できる場所をつくりました。体育用のマットを敷いて休憩するスペースと通路を分け、車椅子が移動しやすくしました。さらに、ヘルパーが介助できるよう、広いスペースも確保しました。また、学生もホール内で寝泊まりし、手助けが必要なときはすぐに動ける体制を整えたのです。

【東さん役】いざ災害というときに、誰からの支援も受けられない障がい者が多くいました。日頃から地域社会との関係が薄い場合は、災害時には孤立して支援が届かないのです。地域の住民として、普段から接する環境が大事だと思います。

同じ災害に遭っても、人によって大変さは違います。緊急時であればあるほど、形式的な平等にとらわれずに、多様性に配慮した支援が必要です。対処するためには、「何が困っていますか」と相手に聞き、相談しながら進めていく。難しいことではありません。人とのつながりや対話の中に、解決の鍵はあるのです。

（本文９４５字）